

改正三河後風土記

拾九

苗檢畵

第 四

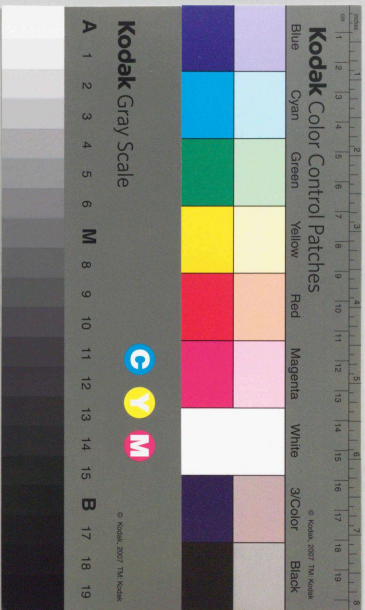
210

ナ

I-19A

圖書分類表

分類	種別	冊數	日期
圖書	文書	三	明治三十四年



改正三河後風土記卷第拾九

目錄

- 一 羽業秀右毛利家海程之事
- 一 秀右尼海岩陣付諸將對面之事
- 一 秀右使者付備之之事
- 一 秀右使者付天正爭戰之事
- 一 山崎合戰之事
- 一 光秀吉野寺殿之付小栗撫最坊之事
- 一 明智左馬助家死付諸將願地配分之事
- 一 神若熱田所出陣付潮川一益軍滅之事

A2101



1-19A



- 一 瀧川小糸上州神奈川軍之事
- 一 河尻詮吉沼敷多而北河尻詮吉沼敷事
- 一 甲州諸士備順飯坂一揆伊謀之事
- 一 氏直甲信右軍自己曾退軍之事
- 一 氏直若以子討陣時小糸和賸忠總事

改定三河德風志記卷第九

羽柴秀吉毛利家講和之事

羽柴秀吉守秀吉は中国征伐の惣大将
 として播磨兵と討征へ備中岡崎の城を攻め
 降附し備中岡崎河合の城を攻め
 夫より高松の城を水攻めし守將清水
 長七郎の小後切つて其城を死して押進
 毛利右馬助輝元の大軍を切崩し九州
 四海一帯より并吞せんと武畧を回し
 智謀を振る極威大量たる鬼神の如く
 是れぬ者こそなりぬれ毛利の家名

名を將き、吉川小早川と始、辱く、
宍衛充房を殺し、今は順正を避、
秀吉と和睦し、西家長久を討ち、
以て上策と云へしと評定一変、天心
十年五月廿九日安國寺惠瓊を殺し、
明使の方へ中送るは釋元平順の地
備中備後備前之國、瀨田殿、奉り
永く同盟の好を結、若此と九州落城
可ふは、此先、我勅の軍切を勵、
と中送るは、是毛利家、吉川
小早川と始、評定を侍は、秀吉毎、不思、

の多之哉、味方、敗軍、
のみ、分國多く、攻死ら、是、防
兼ぬ、知、今、又、織田、加勢、
、織田、少、其、は、瀨田、
徳川、と、謀、合、大、甲、變、武、田、
討、其、感、糸、今、も、瀨田、
徳川、兩、徳、中、國、依、代、向、い、
風、流、若、友、も、河、ん、は、世、
攻、代、ら、力、已、降、あ、は、前、領、安、
、泉、泉、い、も、元、就、卿、の、余、光、の、
中、又、二、三、日、を、避、和、睦、

志しとての事とていふに侍者有は
 安風と一とと多細少層深輝元とて
 和膳と清々く侍者有安風とて
 お遠有へふは侍の望納丸詰一軍と
 納むへいとの返答なり明きは六月
 卯の安風も又侍者の陣（事）卯の返答
 の中少せとハ輝元始毛利の香后一同
 大小怪入御下は深志長と深志中
 望納丸詰一とた一と中圍の侍者も
 甚旨回々の返答なり侍中望二百午刻
 長谷川宗仁 孫も長谷川源兵衛守人通と云に窪利神神
 法眼も此の備田豊良有家に侍るに云

源之部守知守家入と云
丹波守勝高の高り記なり
 東郡より一と
 早馬之自の子けり利侍者の侍陣少少
 明智光秀後進一佐長公の父子討り
 侍りて我侍の流石の侍者も愕然とて
 作天せしと。大量三双の侍者も八
 一とと其更をばいと其望信の早別
 通望をとり具しと馬喰一本と持せんと
 陣中我望見一と陣（事）之陣らんと
 其（事）安風も又侍り深州の望納丸と
 必別さんとと云侍者すくく姑く思惟一ね
 する子細のくは深志長より望納丸一

とく安西も我ハ帰一たり毛刺方もは
扱は和睦想ハさうか々と大ノ不審一睦誼を
吞く唯々と道一と行々々、おハナリと
安國すこと我否方一也一杉本抄列を九
留一人賞とも後一中た一といせ
く我否方てさもはのりおま志二口而魚の
事一こと却来た也唯智先我沸反一佐松
即父子討もさせり一也告你柳力一唯取
子別當指一御若せり我否は早一上君の
吊軍小堂くんと思ふなりむ伊留一佐松
大坂一佐松小堂一樂田おま一ハ早一

上君の御付報一いハもは我否も是き
上治一佐松公の嫡孫之法師教を盡小
之中一我之吏一とも是等のやく一云云と
辭論一和睦せり一もや一若又唇との
りかへは只今一我の勝敗一、今ノ
雌雄を交は一、此方ノ毛刺方毛刺の
も後小堂一、一とも道さる毛刺家そハ
佐松父子討も一、一とも大心悟ハ是
天ノ末為家と弁させぬ、いさ而也と成
愈よ改り我否と思えく、也よ京都一
登り獲と揚一、一とも是も勇三て悦

此の時小中國一の智者と少一小忠
臣其功蹟宗少く此より以て亦元一
折古朝の兵革頼る動くのみならず
百余年天下の乱治を極る世又太平小
属屯一き明也。近きには此の時小
天下に乱極一々海内の兵乱治を人
せしむる時一き此の時小國秀吉の振振と
少知雄畧大政殆凡人は非れ天下に
兵格若くは此人もや備一しんんん
信長父子の功死秀吉の身は兩極その
禍のよ似きも一是保す。天の時人を

以て權を絶つ一む。時既にすむぬ
身を斬り一廣く此人の振振と論する
すても此の時小あ家には甚好し。與人と
す向時は歸した、凡庸の者おんんは
信長の死を深く悲し一盟約を固くこと
甚度其死も一は色も色も斯うつとも
隠さぬ真意の中送信条大量とせん
不敵とやいもん地よけ方として年功を
爰改一秀吉の中違えくらん。は
亦くあ家の後と信のあ家終は彼人の
為に止ん事遠き。非ざる一此

修の盟を固く兼途後菜を世人と
有る期一々ふるは志く一ふはとまの
海城もなう中さき一ふは輝元との
人々此城を固く一毛利の老臣福原誠重の
廣後を秀吉の陣より使し佐長云貴之の
弟親を中世扱ふとの契り少くも宮波
臣一ふはとま輝元治右門小早川
其の流者居とも盟書を送り只今も
上洛所は人質は中近もれ一加勢とも
なふは一と中近秀吉大不感
秀吉より盟書我送り尚北は浮田

八郎秀家と申並一映地五百挺弓音
張旗三拾流口合カ賜一と中近
この浮田といふは元備前を領し毛利
家此旗下なり一今も秀吉中近不
権威城守は浮田家臣豊時豊景才光
者一とま一人を勤免降余させ八郎と
秀吉の筆より約定せしなり毛利家
には秀吉百金のかく弓銃旗本の人殺を
加勢とせし一甚上人質とせし元就の
八男藏平部秀也は植民部左衛門を降し
送付此秀也といふは後々久苗米付候と

少くも人の事之を安んずるは疾者大小
 候に備申候後伯耆之守屋と流丸八郎英
 加勢の人数月年一六月六日未だ備中
 守松と赤立浜城より馬を廻折し良
 森西より一町川の川水漲く備中事と
 備中事には安小一日滞留一七日船路の
 不順へ帰る人馬の息と休め九日野馬
 一ノ穀を以て希くひく押小押着る
 十一日午刻に揚州尾崎より若陣一室小
 宿を殿と若一止着の巻帳と若く
 畿岳を揚ると陣箱一三万余の人数

少くも吊軍より立出者待中心一の智者と
 以てきた小早川の眼力が一も運に推察れ
 如く疾者一時は覇業となり毛利の
 家と回く惣業と増ぬるのそと小早川
 と感頌せしと云ひなり
備中守松と赤立
 備中守松と赤立

秀吉尾崎若陣の諸將封回之事

羽柴筑前守秀吉は揚州尾崎より若陣
 神戶三七位者并丹羽比叡守の諸將
 使者と以て中巻一は内八疾者止着の
 候とうけ討ちして中巻より白備中
 守松の城より攻取ると御大毛利八

本國といひ大軍といひ容易に交戦
難く援兵の事と申乞毛利は此君の
武威は畏服し、今國を避遁し海軍
和睦の盟約已に成り及ひ豈計しや
城は光秀の叛逆し、主君父子討ち
つゝと長谷川宗仁の方より告來り去
乞を少く扼腕切齒し、怒憤限好く
賜國人とし依り一見も亦く此君の平軍
せんと思ひ毛利と和睦し、毛利より
弓矢百出強絶し、百挺槍三十挺の加勢と
乞て今日尼崎に幕陣せり、早に只今

より上洛し、道城光秀我謀殺せし
と存せり、佐孝公治法將の軍誠
いづよ也と申送る佐孝と治丹羽
法將早く光秀と一戦せんと思ひ、
悔り小勢討ちは容易し、打互に
誠是と評議し、十余日を送り、我
今百部三方の大軍より上洛し、
つゝ大に懼ひ佐孝長秀亦早く和
大坂より尼崎へ移り、今又對面し、
大義大忠を感歎し、恨も先偏は
先を告げ、法將も今合し、軍誠と

こゝより如合戦の場可成山崎と定先
者侍其討池田衛之部伝輝ハ今更
先者侍謀成の先陣ハ其侍子主つん
と云ふ山右近友洋入道南坊声と
揚ぐ今更吊軍の先陣ハ東二陣ハ
中川瀬三河清秀二陣ハ池田衛父子侍
一池田政次侍と戦く先陣とハ更
そと双方頗多争端及りんと云秀者
少く池田衛は止君少乳兄弟のよりま
はは口帯て口在せの少陣定と更改
一より一きま水はといハ池田も必改

一之靜浦りぬ侍ハ先陣言山南坊
二陣中川清秀三陣池田伝輝とそ
空り若侍侍至頼澄高と侍の人よ
私侍者ハ三七夜ハ止君の少子丹羽は
尚家一ハの知侍池田も止君少乳兄弟
何れも尚家よおわく磨くの半形り
尾崎ハ秀者系弟と少りハ秀者我
侍方ハ折系世軍被せふハき事なり
御と三七夜と丹羽と怪と愛と秀者ハ
方ハ系弟ハ波ハ大軍よ親と呑色波ハ
指揮よ使つてまは秀者はま也天下の

主と見ぬ所定と光秀討せしきて
後には天下は秀吉のまゝなり
中々侍の懐も思ひ合せざる秀吉の
義兵三方金縛と少くも是は光秀根拠
斜水は丹波龜山の居城とは一子
十多由光秀の守り也安土は明智の馬場
佐和山は志木也備の守り也淀城は竹葉
也よして洞の深もくも津一宮二宮
河古丸とく拾二方也大和の筒井へ
送り援兵を請ひしとも来らざるは
光秀大に惆悵一味方も来らざる

竹の飯長是與一節も筒井順秀も心を
変へて来らる一味也織田七三郎八
討きたり徳川殿は伊勢路を断る
歸らざるを推量し河原
徳川殿を討て来時者は士衆二高
の首列なく懸賞甚重なり但し其
其道く福流一重定く一擧古面也
討留たらんと思ひの分は討候し捨
て置とも害ももたざるぬ空に捕虜は
討殺しよも也急には打て置かざ
思ひつ羽衣の大军志も喰留り討

登りくと馬も毛利も加勢もくもくも也
播州を打立くと少也鵬の蒲勢もく
物毎に闘鬪もく事一鳴呼天すか
と天哉作く歎息一悔之泣之泣居
歩り

秀吉使者付備立之事

羽柴方の先陣は播州高槻の城に
高木南坊二千五人二陣八尾州淡木の
城に中川滋三兵衛秀二千五百人三陣八
尾州有馬花熊城之池田勝二部佐輝
入道勝入其子紀作与之物二千五人四陣八

丹羽五部も秀吉秀二千五人五陣は神戸
三七佐者四千五人六陣八播磨赤松馬場
伯耆備中六兵衛の陣に羽柴敏高秀吉
二万余人惣軍二万五千五百余騎惣軍
神の靈を洞窟の風に嘯極威よく六月
十日播州尼崎を打立くと先陣已に
山崎天神の馬場芥川をくく先陣の
たぐも後陣ハくく西の宮小清水の
色も支く歩り其日の儀系秀吉も
先秀の洞く深の東陣ハ堀尾茂水吉輝
使くくく中巻一兵衛ハ先秀叛道

——之君佐長公也父を弑し
——備中三松の城より取りぬ秀吉
不肖の身有るも苟も人の位と
して君弑逆も公を弑しと金不足
見しきも北に陣を置居て謀略して
亡君の心腹を誅め去ると夜を以て
繼々少所を余陣に相付言久我殿
急を以て主は雌雄を交せんと其旨
使命を馳せるとなり光秀も柴田
源助も雄全を以て返答しけるは
然るの由はむ親爲とる事は光秀の

織田殿を怒り侍事付世の人口を
脛突く如く如く更討し中より及ぶ頃
の合戦光秀の如く是より互に勝敗ハ
亦の天運は徳を以てして徳を以て
急は相軍の事紀とて好しとる
先山崎の南方は秋後内務物利三
子子傳一五利光其子もは柴田源助
雄全三千余人を率て内務物は其母
光秀、妹なり源助の光秀、女軍
なり内務物は喜は福系伊豫守一旗の
女なり相其お備ハ江州士野田源助

政宗子源五郎 政康多賀豊後守
之忠後裔在之部 秀勝他田伊豫守
忠政小川七佐吉祐忠之能六重之西友
爲之合之 甚勢亦後紫田之加行
二千金吾山後之熱門之向之甚勇は
松田左部之重之秀冷並河掃部助之繁
二千右備は丹波士七祖小柳左重亮
平林平太郎 沼田之部之忠川清右進温若
左重之赤井之部之重之秀職権若葉藏
清吉之同之松實川左内知是十部之
繁尾十部之部之重之秀金田小部

佐田之部之重之山内赤内世勢合之二千
金人計之重之八元重丹波多吉部八上之
波多時遠之守秀尚冰之之温若
左重之重之秀之家人之重之之温若
織田重之重之之重之丹波は相智小
揚り之之重之赤井 重之重之重之之始
丹波士は皆合之重之之重之之温若
之重之之重之重之之重之之重之之
人板七百涉地之重之重之重之之重之
向之重之之重之之重之之重之之重之
討之之重之之重之之重之之重之之重之

佐秋仲勢與部在存二千人右備は
該防最弱曾頼宣口牧二萬の衆を
二十人中軍八胡智光秀五千人より
懸軍一万四千更に渡をか概川造打之
先自は川より向ふの言（如後）光秀は
川より東に陣とせり胡智は六月十日
宮川池田父子山崎表へをり乃を是ハ
言山南坊懸門とせり是れ他の言ハ
一人も懸打せりぬ池田父子は是を
見り言山は是心の池の事と云
れり川小をい細石より山崎より東

懸陣の事と懸り胡智の勢より打て
をんと馬とを也ぬる急は南坊
甚富は懸門より打かす池田の勢より
遙先は進者りうてハ南坊最初に
懸門と懸打せりは他の勢と入交り
しる懸陣せんといを言る武色の嗜
家より又也さうは是と歎味方大威
なり

原後使者付天王山守藏之事

光秀の先は秋後内親助ハ概川の白屋
より彼とを言る光秀と陣する今日乃

軍は四世川御(一)首舟、加勢も是に
込今より坂本(川丸)の要害に如く
一戦一もの安去より馬物おしは
後詰の彼も攻り左もくは虫も是より
安去より御城もく物(一)無くも中々
山陰の北味方へおまは宣一(一)より
大軍と見えく攻くも御殿一軍の
御殿は只今よりななり時刻後には
其終文より有海(一)よりと御殿は
自戦執止る程の光秀天運の時と如
公の忠より人若くもく物(一)より

其は我川百(一)あり(一)事(一)一光六
代人より付んとして罵り(一)は八徳也は
大よ(一)たま(一)三歸り其は我中(一)は自物
少く(一)光秀(一)天運(一)御殿(一)敗軍(一)の相
形も(一)是(一)より(一)と(一)御(一)是(一)たり(一)穿(一)中(一)より
羽柴(一)御(一)前(一)より(一)秀(一)吉(一)也(一)此地(一)の(一)地(一)理(一)は
能(一)知(一)り(一)是(一)より(一)天王(一)山(一)を(一)取(一)り(一)て(一)は
此(一)方(一)の(一)大(一)事(一)として(一)より(一)是(一)は(一)堀(一)久(一)部
堀(一)尾(一)翁(一)也(一)と(一)御(一)は(一)海(一)中(一)に(一)也(一)天王(一)山(一)を
取(一)り(一)て(一)は(一)御(一)は(一)山(一)上(一)より(一)也(一)一(一)む(一)一(一)御(一)
今(一)は(一)討(一)所(一)八(一)山(一)海(一)宮(一)積(一)寺(一)の(一)御(一)城(一)尾(一)は

元来、親軍の常士も御免の者二方を
おんまをさす事しをすを―道に兵衛堀之部を
借し人救を押さんと其先來、意を
合せ―木田左部將等は山と云へ―
〇〇〇堀尾、人救と云ふ―と指揮し
防く御免内、御免の者を先も立やれ
上りもゐると勝ると云れ、登る山の去
り方〜〜〜登りおく―木田小山より
也も防げゆると因付ると橋を入して
少く―防く堀久左部は道を勢へ橋合
らう、押登は木田、勢と列く防くとも

此方は我も勇将人救前後よりと云ふ
一月、木田も御免の赤巻教く、遊将
さす也、堀堀尾は難なく、山我も後け向
枯谷、湯澤、
後同後

山崎合戦の事

予己の老練、言山南坊傳、方天王山とを
其後城をんと其後山崎の大愚門我
押寄を打ち、木田、紫田源、将々の備は
惣門の志保へ―一、一番、是と交く
御免を打ち、防くとも、池田
父子、木田の將と並く雲の湧く如く

鏡、まは葉田源なる部、世相好
史より修、先母城地を、多岩發
改戦へは中川は山とよみて先母、
右浦流防流強も山牧、二里より勅集、
備と左より討くを流池田父子は川を
こゝろ左浦作勢無之部、備の右者
寤て守る善のもよちりた右より其
をさんて川をみ討んとは流氣、備、
組せ、先母の流防、之方の款とを
大よ山を襲崩、之方又牧是は
環因後着多賀小川中は取く、

流防山牧を故んと備も之は備より
中川池田より討くをり一戦、山
りも、之方、さつと進教きり、高山
中川池田の山は流防、山士大は
追捨く又津田作勢流防山牧、其
討り、んと鏡を侍作勢は流防山牧、
向い相も中又甲斐、其流防山牧の
監画者、是も流防、せん流、た、二
幸、中、い、さ、や、流、一、討、死、て
類、乃、取、奪、を、書、く、一、と、一、山、牧
是、亦、も、同、意、一、一、蹟、長、千、金、持、魚、鱗、と

備へ勝誇たり池田父子中門より九千
六百の大勢の中へ、合戦も無く就て
敵軍多討死して併留も逃防も固く一統
討死に四牧兄弟は初一番小馳入る
つれ破り又一方我切捨る人馬の長戦
休めける併留も逃防も討るとして
旗馬車取手は向江州留は皆逃失
せり天王止まれば一松田と治丹波吉
敷心せし、城と場庵、旗心風も動
今は熱敗軍と云ふは先秀先達
見まはるるとも然く此所にて討死し

先秀と先勝と一と兄弟おぼしめ先秀の
方へも其旨を中送り兄弟一回は向て
今更内相も奮戦をなす池田中山
男、大勢も合戦一巻く見へる、其
池田兄弟等之物別と見へる執事一
立上下統打振るるる、一統一統は
折は皆脇を捨てたる目当に継ぐ
うくと牙我喘ぐ、其知あるは、其勢
是より逃勇進く討死する、四牧兄弟
始として二百余騎の軍士槍と並んで
討死たり、其後内務物利三最切なり

今日惣收軍と覚悟せし事なき
味方の敗走を我々少くも
厭せぬいよいよ神戶之敵と一戦
し今日之取勝を喜ぶべしと心を
甚す作置すと曰く多勢を懸け更
動搖せぬ固く人敵と進先山崎熱陣の
東の方川を隔て陣を置け大河も度
あらずさきにも近日陣張きたる長西
水常備さりとて我を備え置きて
佐倉の陣中より馳け掛るべきを
只一騎馬我川へ突入り先登り

進む内藤助子作置と十六歳是と
此方より只一騎川へ突入り
一二合打合と見ゆ双方押並て是と
是と水へ落し新敵の家をさすも一回
敵人と馬を川へ突入り内藤助大
陽と武士の十六少敵一人と討つ
生く甲斐れ只捨置けと是と
制し其隙に作置は曲り掛り首取
下乃敵より上り是と始りて
敵味方渺然矢軍討は討はつあき
叶く政敵も其事をも内藤助大

揚々其は利仁將軍後流頭兼内務物
利三とて先夫の股肱の者として以
てたてし之七段より内親の仇値一貫
少月より討死下さるゝと云はれ依家
の諺に父子も捨必死と云て切々其討
中川源三忠清先二千五百騎潰合より
討くをり其後之皆城川包て討死れ
兵益勢散く討死さるる事とて討死
此是代内務物并軍守父子も討死
一方城切ぬけし海我く海一兵
あり軍教とて後任存は源三忠清

子哉取く戴き今日親の歎を討放るも
全く其評の武切也と感涙を流し
謝せらる其討死を橋と糸と其孫を
とて源三忠清今日は骨殖とてと云
れり通るに昔は清三先少て孫ももや
天下とて并吞は成泉名取も昔よりとや
たりとてとて 松陰忠清

先夫有就奇效之小栗栖墨胡

一書

先夫は先子也其敗走を我少て心中
大に回痛し後悔をせし甲斐とて

時又四牧より使者り早川元冬と傳
いし心更に定らぬ免や角と也川
中島哉比田常刀疾照凍之進むと
退くも時より先く今夜八重院寺道
川取唯朝は坂中なりと安土なりと
川元冬と安土は左馬助二千金騎と
在場元冬は未だ斬りてははら早
とやくと動らぬ先疾途方哉夫は
五院寺は何の方と尋ねるは
常刀は馬より飛び出て先疾の馬の
響を聞く川元冬をむね歎やさ

小さく進士依能の岡田太郎八馬茶
進茶途とさへ地を歎せり破り川返
しては進拂先疾の跡をらんとは
とて本道は歎え流しとて
叶はぬ回石は小道とて
堀は馬を系入とて七折と上らんと
馬鞍も上り上り惜みの進士依能の
先疾の馬より下り其馬と川とて先疾
抱面世大日の橋より入る若松先疾
橋より上り空方哉降ぬは故の大軍
雲霧のやき其種旗風よひらり

可也。夥一の軍勢也。故の人数
二千七百余騎とは少つと目
ある。大勢八道軍の勢に集りきり
味方の人数は加りし。四面楚歌に
なり。今頃五の陣中も回一思ひと
周章ひきき。是人救の岩到を誠人と
岩到を有く。見く。申別道八騎士之
之拾騎弓張地。怪卒六百。人余騎多
吏も百の刻。又せり。ぬき。片上。百。人。六
足。さ。り。常。り。光。素。能。心。面。乱。一
々。也。此六月の極暑炎熱。又胡より

若き志。具。是。も。若。誓。も。せ。先。坂。前。
川。九。く。能。も。角。も。せ。ん。と。評。波。一。皮。一
夜。守。の。護。を。請。く。喜。院。寺。を。所。在。に
お。か。す。入。中。身。は。一。番。唯。智。徳。多。米。其。好。り
光。素。の。道。士。信。也。其。場。尾。無。出。部。小。中。仙。人
之。宅。源。十。部。材。紙。二十。部。亦。有。り。其。後。小。栗。柳
方。へ。と。小。懐。の。士。道。哉。色。り。不。信。の。教。法。の
此。一。居。を。も。百。姓。一。擧。と。も。為。人。と。見。一
く。は。教。の。中。より。志。先。道。一。徳。多。米
と。栗。柳。村。織。賜。多。米。甲。冑。八。突。よ。き
咽。丸。也。事。は。表。極。近。ハ。也。仁。也。と。も。馬

より密着さし甚次より其侍光秀
胸後を密着する光秀胸を振擧げ一
六月の炎熱は今猶より甚たる具足と
為給も世には猶はくさく具足と密着
光秀情なき奴と云れども其所以を
密着せしむるも之可計りて果は密着
借乃者尤大に驚き馳集り坂中近ハ
道もや道くゆとやたる光秀ハ胸を
見せし我今こゝに留る今は此り能
汝亦我首切し知恩院へ歸り其
いハは冷方れく胸を介踏して光秀

首を落し以て時光秀歎五拾九端拜也と
人衆とて礎ををりて二十七日香を
緘せしより僅に十二言不忠而名ハ天罰
回らば其理り天地神明ハ眞鑑まんだんこと
おそら一ハは胸を出入光秀ハ死骸を
田乃中へ深く隠し藏り一者古と因く
道と急く解く夏ハ経夜も也月影は
傾く山の増より東方已に明んと
是を以て又も也也也東来心一掃大前を割
討殺し衣裳物具副一もく同も以て
らるるは其後也ハ胸を介踏し

四、八光秀、首と馬鬣又包み海の中へ
隠し置其身は漸く切抜けし海にも
曳以流川あり翌十日羽柴の大軍海軍
歎と追う所へ三井寺より其處の如く
村井春長朝、郎等小隊候と申道乃
傍りし海の中より泥足にて上りたる
跡ありし、心算く海軍と被り書るは
首一ツ取らば其首と洗く刀是ハ光秀
お遺れ即別無事と申陣へ持し去り
其處は光秀、除海と探し家々を留中
せしは候と申すは川村也といふ

揚り黄河を加へら其知、小栗栖の百姓
共と光秀、死骸を拾ふに甲冑威毛
拾獲の故其の常衣は太刀、石切といひ
光秀平生秘藏の名物なり其酒とい
ふれいと、百姓古も厚く慰賑を施
す侍扱又秋着内前物利之は山崎の新堀
を為走く、白州野田は隠し居寺侍と
生捕といふ事ありしは光秀、死骸の
首を纏み着内前物と回く粟田は日暮澤
に獲りてをくまけり内前物と生捕ハ
追江伊賀村の猪尾甚物と云者之、江州

山本山城之阿閉万太郎長之は、前後
 小法師之助とあけり、光秀は一味して
 秀吉の留守を幸と、長谷の城を襲ひ
 資成を悉く奪れり、今八百戰場、我
 外あり、城敵突へ、前んとせしは、郷民の
 為に生衛を是も一旗回く、礮は以て、侍
 妙不可、いゝ、光秀一味の、殘黨生取の
 頭を櫛の齒を、いゝ、也、
編者抄録

明智左馬助、後死、日、清河、順、地、配、分、

明智左馬助、二千騎、いゝ、安土城を、守り、

在けり、羽柴家、金、三万、金、計、して、西、五、
 十、里、就、より、六月、十日、山、本、城、表、して、一、戦、有、と、
 少、路、は、亡、君、後、籬、の、我、長、勇、氣、烈、智、
 味、方、は、不、義、の、天、罰、近、し、い、は、我、此、
 城、を、潰、る、為、に、何、も、を、守、り、し、も、只、山、本、の、
 勢、を、弛、加、り、光、秀、と、死、を、共、に、せん、と、
 志、を、交、へ、し、よ、か、陣、に、是、處、如、光、秀、は、
 山、本、の、一、戦、は、亦、負、者、我、寺、も、た、傳、り、
 為、坂、中、へ、川、返、ひ、と、い、は、し、小、栗、栖、と、い、
 七、民、の、為、討、を、せ、り、と、の、略、を、少、細、ハ、如、軍、
 其、冷、れ、坂、中、の、城、は、川、返、し、光、秀、の、

妻子束成利殺——其身も生々甲斐
なほは虫よ自殺せんと思ふの粟津
と水(大津とさ)——池端侍羽柴の
大軍昨日の勝軍よ赤——堀之を即
赤改と先と——雲霞のや群り
曳く声——大津松本のおおりの浪
赤かへ浪色道押来り光秀の居置坂を
一呑よせん勢なり左馬物と札の過り
色よ——虫色忽又我を交(さ)り左馬物
善先へけり右付左付池回り力哉と——
若——と我もささとも左馬物、

二千騎大軍よ川包よれ或は討て或は
落たり介は左馬物一人よなり色は
終り一方我切後者——名もあつて龍尾池
の湖(馬を調と赤入きたり左馬物其
日の物とは二の各と)——侍名たつき境と
若——白練よ將能水徳々終たる雲龍の
陣羽織も——大襟毛の駿馬よ跨り
さ、信や志賀の浦風よ立波と淵之
——唐崎の一本の松を目前と——
聞くと馬をたよせたり羽柴の大軍
口よ今思ふ左馬物の水よ沈て死せんと

此方の湖宍より三双より只渡くと海居
 たり右馬物は長く唐濟させ事と
 れく系付者もは大津の浦より渡り居
 坐る大軍よりや左馬物ハ海上と居
 たりと河色遊遊と湖の宍と應付て
 池交て居る左馬物ハ能れく唐濟て系一
 一本の松陰より馬より入り松の根より渡り
 けし追表隊大軍戎遠此より一休一
 追兵已より四より及び付馬より一休りと
 赤系只一系より坂本へ馳入り回中小十五
 河の其業の業より馬より入りし終

せ切と業の橋子より馬と繋け矢立の
 手元より帖紙を割り此馬は只今
 湖水戎隊より業馬より今分捕せし
 此方不便と加へて馬は一と書付し
 業より結付甚身ハ坂本の城より入り業
 妻堀部四郎守備隊の女侍後後醍醐天皇御業業は五日後林村業の業自断天
 守唐守の
 下と腕首を種と畜子と侍を産り
 同宗の大軍湖の濱こゝより書く
 押さる十五業と繋一馬戎より書る
 献一は是は秀右大と業愛有業

志津の嶽の軍も此馬よ高は是なり
しとと叔羽柴の大軍ハ穽麻所葦の
七く十重共重き城と取巻たり左馬助
先日光武の安土城より奪来り
佐長公秘藏しし一不動の太刀
二字玉像の刀葉研菟部のはげん明葉
乃肩衝乙巳茶の笠鉦よこの水拾遺葉
の選跡ホと衣威の常葉揚ま包ま女房の
常は結月天守の武者走持あ
大喜揚いよま子の人よ頼入の明智
日向光武選と討死とよ

妻子ホ悉く刺殺し左馬助も只今自殺
けりなり明智一種止ししは明智は
天下の重宝一時は焼失人も至るも
因縁ある少く右大將家の君直
をとり玉の巻くは彼包哉
天守より下り常葉は数万の常葉を
尺く茶は松葉永弾正平蝶の笠成
歩割く後其男も切腹せし多門城の
者御とは雲泥の遠せりと感涙を流し
たり其後左馬助ハ二の谷の塊と雲泥の
陣羽織よ金子百ありし小姓一人使

~~~~~ 坂倉の西教寺に送り之條の法事を  
終る今は思ひ無き事なりと光秀の妻子  
とも其名の妻子とも方より利敵し燒卒に  
火をて天守に焼上る我れ我れも燒す奈  
捨切り火の中へ入る名を今人の世より  
穢し者といふ事なれば之君を誠を心  
光秀の下より天晴の武士なり者侍  
事よしと感せぬ者はなかりなり 其日  
秀吉は勢我分て丹波龜山の城を  
攻め光秀の長子十三歳光秀をも謀り  
任長公の父子を始に能寺二條にもあり

少く忠死の人と厚く改葬し又より  
改葬し執事任忠卿の長子之法師に  
以て丹波丹波村柴田信家も小町より池より  
任権任家も東をせし丹羽比田村の  
軍に居る余會せしは秀吉の討し  
~~~~~ 之法師九今年僅く二才なり九  
織田家の守護なるは之君と定の任権
任家あ人を懐見しと任忠卿の遺命
~~~~~ 茶田徳信院之を以長谷川  
~~~~~ 安七は後以しと之法師九拾五才なり

のよ近は佐長公不願の由と諸將
別分一々身儀を一一と評定一庵張
佐雄貞徳は佐孝江州長湊小願を
評定一柴田播州は光秀、願一吉房
丹波城秀吉願り丹波は秀吉の爲に
甚子と定たる佐長公の末男次九秀徳の
扱へ一一との事とて是は佐長公の秀吉の
沙の私恨一一とて人の威儀は若枝、丹羽
孫別は池田父子勢州長湊、瀬川は扱け
五万石と備一一二万石は博多は扱く
其外江州二萬石、二佐師九賄料と定む

何事と秀吉一人の沙汰一一と佐雄
佐長も一乞も加ふ一一及ふ丹羽長秀も
全く秀吉の如く佐長も扱く一吳沛
一者これ一柴田賜家大に懐くを合
秀吉の威權を懐み今日評定の席上は
賜家付去人縁頼一物々甚然一一又
衣袋裏に尻と放き好一一傲慢
不礼の事候せ一一丹羽は秀吉より評
定一只今四海大に私を忠度大望し
早く賜家と討果一一とて秀吉大
先々賜家ハ尚家ハ元充者將たり

傲慢_ハ凡_ハ智_ハ也（まゝ）非_ハ以_ハを_ハ少_ハ也
 心_ハ以_ハを_ハさ_ハる_ハ彼_ハより_ハ凡_ハへ_ハより_ハさ_ハる_ハ法_ハ將_ハ
 之_ハ法師_ハを_ハ江_ハ謝_ハ〜_〜各_ハ城_ハは_ハも_ハ劫_ハ也_ハ
 者_ハ之_ハ付_ハ備_ハ家_ハ付_ハ秀_ハ吉_ハを_ハ備_ハ將_ハ又_ハ伏_ハ兵_ハ也
 諸_ハ〜_〜秀_ハ吉_ハ我_ハ討_ハ人_ハと_ハ計_ハを_ハ申_ハす_ハ〜_〜公_ハ是_ハ日_ハ
 秀_ハ吉_ハ道_ハを_ハ暫_ハ〜_〜早_ハ〜_〜公_ハ是_ハ日_ハ長_ハ相_ハす
 江_ハ州_ハ長_ハ濱_ハへ_ハ備_ハ城_ハせ_ハり_ハ備_ハ將_ハ公_ハ是_ハ日_ハを_ハ以_ハて
 其_ハ牙_ハ城_ハを_ハ備_ハ城_ハせ_ハり_ハ〜_〜江_ハ州_ハ長_ハ濱_ハ城
 無_ハり_ハ七_ハ人_ハと_ハ秀_ハ吉_ハい_ハう_ハす_ハ計_ハを_ハ也_ハ謀_ハり
 夫_ハ大_ハと_ハ教_ハ意_ハへ_ハ濃_ハ州_ハ垂_ハ井_ハと_ハ名_ハを_ハ江_ハ謝
 一〜_〜大_ハと_ハ根_ハ根_ハの_ハ此_ハ也_ハ秀_ハ吉_ハ少_ハ〜_〜

笑_ハひ_ハ我_ハ行_ハの_ハ速_ハ報_ハを_ハ〜_〜備_ハ將_ハ公_ハ城_ハ宮_ハに
 一_ハ〜_〜公_ハは_ハ在_ハす_ハ〜_〜無_ハり_ハ七_ハ人_ハと_ハ秀_ハ吉_ハい_ハう_ハす_ハ計_ハを_ハ也
 次_ハ丸_ハと_ハ人_ハ常_ハと_ハ共_ハ〜_〜公_ハ是_ハ日_ハ備_ハ將_ハ公_ハ江_ハ謝_ハ也
 本_ハ初_ハ也_ハ〜_〜次_ハ丸_ハと_ハ回_ハ信_ハ〜_〜由_ハ備_ハ將_ハ公_ハ返_ハす
 是_ハを_ハり_ハ秀_ハ吉_ハと_ハ備_ハ將_ハ公_ハの_ハ優_ハ劣_ハハ_ハ以_ハ時_ハ人_ハ皆
 是_ハを_ハ公_ハ是_ハ日_ハ志_ハ降_ハす_ハ〜_〜備_ハ將_ハ公_ハと_ハ共_ハ〜_〜公_ハ是_ハ日_ハ備_ハ將_ハ公_ハ
 備_ハ將_ハ公_ハは_ハ是_ハ日_ハ備_ハ將_ハ公_ハ也
備_ハ將_ハ公_ハの_ハ手_ハ也
 備_ハ將_ハ公_ハの_ハ手_ハ也

神_ハ君_ハ熱_ハ田_ハ所_ハ出_ハ陣_ハ白_ハ滝_ハ川_ハ一_ハ益
軍_ハ油_ハ〜_〜幸_ハ

神_ハ君_ハは_ハ伊_ハ賀_ハ路_ハの_ハ報_ハ苦_ハと_ハ浸_ハを_ハ少_ハく
 六月_ハ吉_ハ謝_ハ公_ハ崎_ハ〜_〜所_ハ備_ハ將_ハ公_ハの_ハ織_ハ田_ハ敷_ハの

四好我思古軍、先秀と謀成、三月
八日軍令を下さし、十官より尾州懸田
編年近少進發あり、知十九日羽柴飛鳥
秀吉、使を命、先秀を已み謀小作
たる由告奉侍給、定より行人敷と
是處へ川返り、又階川右近將監二益八
織田徹の信を蒙り、因東と誓願、
上州取揚の城は居、越名栗洞通也
々々、六月七日の曉、家より
杉山小介貞次急脚、て来り、織田徹

父子横死、乃抄中、我告は澁川一と
大に怒り、姑一、致し、て付抗
々々、有、源兵平、兼、田治吉、
澁川徹、更、之、信、を、蒙、り、其、更、を、告、
徹、更、取、り、是、は、天、下、の、一、大、事、之、姑、
隠、居、し、秘、せ、ら、る、他、と、し、き、し、也、と、云、一、益
少、く、女、の、中、取、り、成、さ、り、ね、く、好、事、門、と
お、り、悪、事、千、室、を、侍、と、云、澁、川、の、や、り、
隠、居、と、す、る、と、一、益、日、を、云、一、は、他、人、の
口、より、洩、す、は、却、く、之、人、報、命、と、し、
由、中、澁、勅、を、一、我、中、は、因、東、取、揚、の

諸將を悉招きし以て據處一是也
然り蓋人質をも返事 我乃ハ一日と
しやく上洛し運と天子は是に君の
儀を被ひし一若上州の法將此處に
来し僅爲て討つるんと云ふ形は
是と時長なり一戦して討死せしは
尚ら如何と命を惜めんや若又法將
志を交せし味方せんといふも小田原の
小原一使と云ふも小原父子を以て
一戦と云ふも其勝負は任中一益上洛
に君の弟軍屯し上州武州の

諸將一是と曰減すも少くは是ハ早に
以て一と云ふも一者も内儀大和智
秋室小幡上徳介徳吉因之河与信吉
長尾但馬守長由長信濃守由繁吉田
安房守昌幸芳田源右左衛門盛重
安中越中守 成田正俊守氏長木外
宮内定村上田又次郎入道安摺兵和國重
佐業温川相摸守氏勝之山内守重光
名和對馬守宗光余如北條路守其系
小田原守 其始と云ふも上洛の法將
皆原將一益討田一益討田一益討田

不意の大変あり相留老疾鞭逐し
信長公也父子討せさせり下し一途を以り
信一益は急事上居し此君の弔軍
せんと此名の人質は善臨の場に入在
在きは悉く退しし事なり一益一各此
弊より一益と討しし事我は柄小降し
降し来せんとすし付分今事又一戦あり
一益は前進とすし一若又信長と守り
少弱と憂せし我中下知は信一んとすし
たりし事今より小田原へ使とすし麻橋
を渡さん程は小降父子是近書馬也也

一戦しし一益は上居しし一とすし
一益ししと云捨し其又入其後信長おきて
評決す知内儀小幡一毒小降あり
中けりは滝川今の一云天晴盟と
なりし事一義勇部也しし事是也
今頃の大事を少しし事也其義也
中の中一我一人質と返さんしし事
我しし事一不意の挙動也しし事一物
回意し生死を去しし事なり外也しし事
と云し信長を去しし事一益とすし其
滝川信長と其次より返す事一益とすし

再ハ清洲ハ對面一各ノ發信滅不
感悦也汝知や一益ハ之君ノ甲軍
と急くと一上の方也一佐藤信孝ノ
口是身之也托ハ一師一柴田丹羽亦善男
乃屬、故多河也ハ賊后若未謀又
伏せん事は一益ハ上洛を待ハ不_レ以_レ系
小幡氏故トシ_レ表裏者信長父ハ父子
討也_レ一と_レ少_レハ子連_レ盟_レ夏改
此弊と幸と一益を討丸らん斗一積
回さん_レ必_レ定_レなり_レ勅_レ先_レとせ_レも
さ_レも_レ又_レ討_レ方_レなり_レ小田原ハ使者と也一

一厥_レ鳩_レと_レ信_レさんと_レ中_レ送_レる_レも_レハ_レ氏_レ改
父子は早_レハ_レお馬屯_レ一其_レ討_レ一戰_レ一_レ
上洛_レも_レ一益_レ討_レ丸_レも_レ須_レ運_レハ_レ天_レ
但_レハ_レき_レと_レ思_レハ_レは_レ何_レよ_レと_レ云_レ法_レ術
也_レ之_レ也_レ信_レ義_レの_レあ_レる_レ如_レ誰_レハ_レ否_レと_レ中
一き_レと_レ返_レ答_レせ_レり_レ信_レと_レ回_レす_レ新_レ田_レ三_レ郎
を_レ使者_レと_レ一_レ小_レ田_レ原_レハ_レ也_レ一_レ名_レ聖_レ言
小_レ田_レ原_レハ_レ系_レ一_レ甚_レ旨_レ遠_レ坂_レも_レ又_レ小_レ幡_レ氏_レ改
父子は_レ是_レ天_レノ_レ賜_レと_レ大_レ又_レ信_レハ_レ早_レハ_レお馬
一_レ下_レ法_レ術_レハ_レ一_レと_レも_レ言_レ事_レ也_レ小_レ三_レ郎_レ地_レ端_レり
新_レと_レ中_レと_レは_レ一_レ益_レた_レこ_レを_レ思_レひ_レて_レけ_レつ_レハ

運のやとともナリ改む趣一と用意
セリ 編海防略

澁川小原上州神奈川軍之事

小田原より小原父子織田激横死を以て
大に恨み天運時を生りしと大軍我
體一大小の大將新九郎氏直は富田
石神の方より軍を遣免本意は旗を
立てたは佐佐木陣一は左系吉氏改之方
余騎松山筋より武州吉見山曾山を
本陣とし一先は神奈川烏川を以
軍をを免父子大に搦しよ向く越勢

五万余兵六月十八。本意は本陣は氏直
の身武州小倉郡神形ノ城を小原
安房守氏直ハ血氣ハ若者澁川筋は
信長父子横死一と上防踏動の沙汰を
少將卒とも心儀一と向く我軍は
たつて上州武州の寄余威形く
澁川小原を以てしよ吉氏身命より一と
働屋を以て遊兵一益免神なり古勢を
可はち留まらり河原の事ありきいさ
追付一とく名せんく其勢ふ千計り
陣列を難せし馬我をせたりあり

滝川は洲門、赤野部法忠より二百金入
流し、麻摺の場と守り、世は四半、次長世
稲田九龍より八拾金と流し、松枝の場と
守り、世は八、一万八千金と具し、
武上の城、神志川、鳥川の世、今密の
為に、波陣、以上州の守、小幡内宿、和田
由良、安中、源谷、成田、上田、高木、山本、部長尾
志、回出は、可也、
小幡方は、安房守氏邦、血氣もせり、
敵と大に、尼備り、
揚討し、
武田信玄、湯敷

属し、
か、
敵の、
昔を、
小幡、
敵、
動、
此、
今、
石田

乃者二百金人討死—上州—
と始百八拾人—討死—
多ありあり—
川—
暑熱—
小隊—
怒り—
始雲霞—
一—
雌雄—
續—

津田治重—
富田—
文重—
沼—
悪坂—
小勢—
小勢—
お—
若我—

志中一は川包を討たんと口きと遊立り
本流の胸の胸く遊立きは思ひの討つ
との少ふは後陣の備よきたるを六
氏出の本陣遊立友宿き一と遊立り
一と遊立り曹山の方より陣取きと熱大將
氏波の先陣伊勢備中貞宗共方
師者も始一万余騎小原英法も氏親を
先の遊立として神奈川と池田り
滝川智の後昭より側の騎馬達者の
坂東武士同を伴く馳立きは滝川
依直始陣田岩田栗田吉田由の遊立

共堅死を被手し頭を揮き奮戦を
とも終り驅負て敗を以一益大吉陽く
死を命取り遊は天より坂東武者との
合戦は今日始なるを口教に遊立り
織田殿の口名を汚すは只川遊立り
討死せよと知らぬきは博田栗田太田
等の勇きとも任りや及くと馬の鼻を
川遊立り二千余人大山の崩るごとく
馳を存水際方は大勢もは討つと
取圍く討死らんとす我破くは
死り取くは遊立一奮戦を遊立り

氏規曾と源兵と無法哉好(勇異
之双)名士正兵奔共入智く改録小
折前氏由々徳本も又あり返一大年
方右より陳三也は一益も己より老く
者も津田治重の八郎部同時治危
岩田市重の回平前栗田全七重右田五重
藤原保重の始完竟の瀬川勢五重
金持河死一其外子員多れハ一益ハ
後陣ハ上別元又彼と之各万合カ
可ハは五銭一之運の能と減た
ハも也とも上別元ハ今朝の銭も能也

其一子員も多くとハ今今日の五銭ハ
以免と書付也一と中書ハ一益と
今付カれく殿様ノ城ハ川邊一今日
河死せ一人ノ姓名を書記一合張と
活く城下の寺院へ送り此書付也
幣一其後一益付上州元を招き一其後
終夜酒宴を宴す一益自刃小敷を
拍く強とうたハ其後一益病子進
兵の交り難河向中の酒宴と書く
幣ハは合張此活路も拍子を取て
今ハと鳴多のと相いハ其も其も

古傳相一益太刀長刀并金銀葉日須
秘藏也一喜画珍宝亦悉取也一
上州元と換く今日一鐵の口名と炭一
多崎宮も明もは暇乞一願橋城、或
并立ともく今の人質をば皆願く一と
歸一古傳上州の法將皆一益の大勇
養徳小感一浪と流一倉賀野とて
河津送た々々一沼田の城とて八志田
安房も郊迎一々々原く馳走一浪訪
一々々道成傳一益始は木曾路と執事
一々々木曾九馬路も一益、養育りや

感一々々軍勢救多良路と勢州
長湯の一益、一願とて送らたり一益
雖れく喘ふせ一知も也炎妻は謀り
依一之法師九織田家御啓とて安去と
在城せ一々は安去一々々河湍一恙
れく居城長湯一傳りたり世一孫一々
鬼滝川と字せ一とて滝川は少願橋
とをく一上居せ一とて上州去州の
峯は小隊と款一雖く皆一降糸と
語らる属は佐州山端城と道家義兵
正業伊奈郡の毛利河内も秀頼も忽

城を捨て上洛に志田安房と昌幸ハ
小隊ハ月陣らハ 徳川家ハ頼元佐州
河中鴻城を去後首長ハ上杉宗将ハ
不傾城侵掠勢人と城後の岡山二本
まて攻入し和室却りし織田殿
西父子討せりし吾弟蘭丸九中のみ也
討せしと少く我一日も早く却り
攻せりし若の讎を報し兄弟の幽憤
をも慰まると男之早速海津(川
返)一伊奈の毛利河内と小諸の返敵
吾弟(節)も謀し命を不日ハ河内鴻と

折立んと用意に國人春日園防未及
此處は宗一人質を取返さん居といふ
帰路を妨んと強動を長大怒り
女中世華と弟一人質を取返さんとせしは
力成以て此しとて人質を川邊城と
ありて人小織田方の為成者討て上杉
家の恩受は頼元んとて山崎水原小
埋伏し帰路を妨ちとてとて遺捕ハ
様々馬場より春日園防の二子と始人質
等ハ利敵し本質ハ人質計り返りて
難なく浪州令心は帰路に世より

勇哉称一々 兕觥を以て云一はけ人の
事一々
形字は甲州中津八幡寺に在る
神曰魚行と云ふ事也
神曰魚行と云ふ事也

河尻徳吉治教
百物は徳吉権死

河尻徳吉も徳吉は織田殿より甲州一箇より賜く立圍屯る如徳吉元來兼暴小して怙恤の才乏く凶民を虐使す是ハ凶人更ニ懐く疎遠をくは
徳川家常々仁政を施すは徳化景示
カヤくよも甲州の人民幸々

徳川家と慕ひ徳吉小智むと思ふ
風流を以て徳吉 徳川家と忌憚る事

一 時 徳川家へは徳吉は徳吉と
貴國は徳吉小臣は徳吉は万変四介抱哉

頼しあひまゐるとの事せり

神君元來徳吉第一の御大将也へ
徳吉ハ一兵隊諾一多し河尻方へ徳吉と
徳吉ハ一兵隊ノ事也
中へ徳吉ハ一兵隊長公父子討ちつ
一は滝川 表毛利 道家ホの坂東の

半は甲軍の爲詰城と云捨てて
登る由有り河尻と定て折立一と
有る百物一願樹と名倉在方八郎治と
是さ向此良の事せむは治事お後
有一若又急より居せんと折立八郎州
治は一捨陣配の少くは百物と捨
と我小傾内と無くは居せんと
是より下さる是我と治告疑入

徳川殿は我を傾内より有く謀さんと
計り有りやとと相お察し百物と我元
折立し満心なく百よりお後ある程と

と云れ酒をまゝ先溜く辨せ後
其夜ハ六月大暑前中百物と宅はあて
外一先小姓と合一夜中一窓下の故を
切落させ治を港を以て百物を察知
百物の後者大大と警知通力一をり回
りてを告所為、 徳川殿（昔公をむ
者大にのみ、 徳川殿（勤振一
思ふに治法浪人より先幸と一捨我
配一河尾、 徳川殿（後を切害せ
大羅免一ふはと與叫く押寄たり
治告由人より治謀之増減を僅せし

自勢ハ、りよ、新府と云、其首

山縣、之部、波宮、三井、沼、部

稲、湯、物、結、十、屋、久、
五、世、編、年、夏、の、也、
法、吉、と、討、九、是、は、六、月、十、八、日

編、年、十、六、日、
た、り、と、と、
神、君、少、石、我、信、也、と

中、合、を、た、る、筋、目、を、思、ひ、河、尻、と、被、助、せ、ん、と

之、も、如、彼、是、我、を、疑、く、百、助、を、殺、す、是、形、也

之、一、情、き、武、士、を、法、吉、と、思、ひ、主、道、不

敵、さ、せ、し、こ、も、強、を、た、り、と、思、ひ、落、濟、又

あ、ま、り、世、世、を、し、あ、ま、り、と、り、た、き、
岩、澤、川、
夜、澤、川、

編、年、十、六、日、

甲州法士堀順貞被坂一揆の事

織田敏の命と受て甲佐の法城、城

守り、堂、諸、士、皆、城、を、捨、て、上、居、す、れ、ハ

其、首、佐、吉、と、止、さ、せ、し、
法、吉、類、重、

伯、父、新、次、郎、滿、珠、の、子、小、右、郎、頼、忠、四、好、の

家、人、を、皆、一、法、吉、郡、又、押、入、り、高、津、の

城、を、攻、め、九、女、金、年、の、懸、懐、を、穿、き、佐、吉、

を、よ、追、出、さ、せ、し、
小、笠、原、長、時、の、背、洞、窟、也

上、杉、原、勝、の、援、を、増、え、源、左、衛、門、尉、也

河、中、治、の、四、頃、之、村、上、佐、藤、与、茂、清、の、子

源、吉、五、郎、也、我、候、より、勢、を、起、し、
源、左、衛、門、尉、也

被、助、より、河、中、治、を、傾、畧、し、
小、笠、原、新、次、郎

氏車は上州武州の峯崎澤と糸子也
甲州と糸子ととて 穂川家には
武田家の四后武切の半番と招き
多し世先官の梅香の四后穂坂半番
有泉大学始の穂をさへり酒井屋敷
志次大須賀少部多の屋敷を是神楽を
正徳日外之吉定好成継吉重の正一
大久保七郎重の忠世石川長も糸道多
豊後吉廣重も百根の忠と語て甲州
巻のさし五人を穂種一隠士を招き先
ら付又多八郎正徳を口使とて

依田重の依田蕃も早く甲州四好の
吉成招きと命せらる依田甲州
板坂藩の穂をさへり武田重は吉成
横田重重の一番も池加の守もは穂を
幕の重重も者千金人依田重は穂を
小治の藩も穂を穂大須賀少部は
市川重も吉成降士を穂種一穂坂重
長茂もは吉成山ノ穂天紳川の四好
穂種一も守もは穂種七九郎重も
穂種一も守もは穂種とて同く依田と
守順一も命せらる穂種一も守順

掃部他佐願も昔は後藤より出たり
降し是は家より甲州の一揆共大村之黨
曰伴實と云を首將とて小幡勢哉
甲州へ川入さんと云氏重大に怪し
彼亦道徳を共へ最と云ふ郡内口
より小幡は其父氏務源経鐘の佐氏
湖内 惠林寺口よりは小幡安房守氏邦
編年氏邦川坂口よりは親父新右部
今前忠良川坂口よりは親父新右部
某 編年より後小幡十部氏房と云家忠良地路徳信皆親父新右部
と云は其父より云は政事より云は親父新右部と云は其父新右部
押入ると云一揆の首長大村之黨の伴實
是は苗次門の色より云々 小幡勢の

来は我侍々案内せんといやと
侍妙は一揆の佐と樋口某と云者忽と
志と云一 徳川家(其旨は是も
及し弟もハ等々帰順して山梅書
川内有永大守徳坂常陸介小幡我々形
勸切之より男小幡より一軍速宜山勢と
信一苗次川色へ押入と云大村と始
一揆大意く討果せば親父新右部川坂口
より云々 向ふと云々も其旨は是より云々
惣勢強は其軍哉師は有永徳坂子介
山内元へは山内盛州と云はり回忠也一

樋口は其切よりなりて山家人より百
 者大村亦は流より仰見といふ甲州
 未徳なりといふ可也後辨記の事
 是と釋澄せりといふといふ也我輩
 大に傑七部有忠世甲州より初きといふ
 陣以石門長門より唐通本多豊後也
 唐孝其子彦忠部唐重景部忠部忠
 正徳中も同く部忠世は唐通正徳中
 誠といふ信之部流防より初き流防小吉部
 頼忠と流防といふ信之方ともいふ大草
 右邊知久大和頼元回部部頼氏信隆也

回く帰順せし先きり七月二日は
 神君も所自身流松より所出馬河り
 甲州より入りし者もは五人皆根葉兼新と
 輔一馬也迎き甲佐の坊時令に士
 小尾惣物祐光清令修理流久延部又十部
 等も阿外岳五部正徳よりいふ帰順
 八代部本葉の海も因榎也盛は八本葉
 山中七著の士十七流之海属せし信州
 小諸と長より過流無属盛昌馳走り等六
 先方より士口拾流之属せし信武川
 小倉内藤物折井市也其も池あり等六

武川世令乃者、は月俸之場、十四日、
酒井大將尉忠次、佐州一系、揚り、
東三河の勢、川具、伊奈、
之、
一系、
忠世、
順ひ、
包、
矢石、
之、
東三河、

政、
人、
せ、
不、
東、
廿、
家、
一、
主、
討、
氏、

氏重甲佐出軍、自乙酉退軍、

編總記

神君は七月廿四日甲州八代郡柏坂櫻山
不^レ若陣一^ノ入我田の年多くし事
汝湯の^レ古有一條古^ノ多^ノ四宅^ノ
所^ノ定^レ也^ノ柳^ノ康^ノ改^レ大^ノ淵^ノ賀^ノ康^ノ
如^ノ多^ノ豊^ノ海^ノ之^ノ廣^ノ者^ノ父^ノ子^ノは^ノ若^ノ少^ノ子^ノ口^ノ
陣一^ノ松^ノ平^ノ主^ノ義^ノ以^ノ清^ノ宗^ノ因^ノ義^ノ深^ノ次^ノ吉^ノ
家^ノ長^ノ未^ノ成^ノ川^ノ坂^ノ口^ノと^ノ西^ノ之^ノ枝^ノ古^ノ依^ノ彦^ノ吉^ノ
是^ノ之^ノ海^ノ鳥^ノ居^ノ吉^ノ多^ノ之^ノ忠^ノ八^ノ至^ノ代^ノ山^ノは^ノ
陣^ノと^ノ港^ノ向^ノ是^ノは^ノ小^ノ深^ノ之^ノ勢^ノ来^ノと^ノも^ノ古^ノ府^ノ
入^ノ立^ノ也^ノ陣^ノ公^ノは^ノ為^ノと^ノし^ノ少^ノは^ノ公^ノ之^ノ入^ノ
志^ノ田^ノ安^ノ房^ノと^ノ昌^ノ幸^ノハ^ノ古^ノ斗^ノ深^ノき^ノ者^ノ也^ノ也^ノハ

河^ノ中^ノ鴻^ノノ^ノ言^ノ坂^ノ源^ノ之^ノ部^ノと^ノ深^ノと^ノ金^ノ山^ノ深^ノ
内^ノ也^ノ一^ノ河^ノ中^ノ鴻^ノ我^ノ奪^ノん^ノと^ノし^ノ小^ノ深^ノ氏^ノ也^ノ
是^ノ亦^ノ内^ノ也^ノと^ノ類^ノと^ノ一^ノ甲^ノ徳^ノ二^ノ洲^ノと^ノ平^ノ春^ノ
せん^ノと^ノ古^ノ万^ノ古^ノ千^ノ此^ノ大^ノ軍^ノと^ノ一^ノ碓^ノ氷^ノ珠^ノ我^ノ
之^ノ一^ノ佐^ノ州^ノ佐^ノ久^ノ郡^ノと^ノ後^ノ向^ノ以^ノ上^ノ新^ノ京^ノ路^ノ
河^ノ中^ノ鴻^ノ野^ノ郡^ノと^ノ平^ノ均^ノせん^ノと^ノ海^ノ津^ノ城^ノと^ノ一^ノ
若^ノ陣^ノ一^ノ間^ノ牒^ノと^ノ以^ノ志^ノ田^ノ言^ノ坂^ノ源^ノ深^ノと^ノ
揮^ノ知^ノり^ノ忽^ノ又^ノ言^ノ坂^ノと^ノ生^ノ捕^ノ之^ノ海^ノ津^ノ河^ノ
お^ノわ^ノく^ノ陣^ノと^ノ志^ノ田^ノ安^ノ房^ノと^ノ一^ノと^ノ一^ノ
最^ノも^ノ知^ノる^ノ志^ノ田^ノ安^ノ房^ノと^ノ一^ノと^ノ一^ノ
抗^ノ广^ノ川^ノと^ノ濱^ノり^ノ若^ノ光^ノ寺^ノ表^ノ一^ノ柳^ノ多^ノ河^ノ言^ノ坂^ノ

遷味家歌——上杉、京橋、三河、四國、平川
と兼ふ以て、對陣、まゝ、實、り、な、一、戰、
ふ、し、及、び、尼、の、倒、り、し、川、返、せ、ば、上、杉
、京、橋、は、河、中、橋、野、郡、を、平、均、一、し、た、り、
村、上、義、統、の、四、傾、も、も、は、文、種、一、郡、を
其、子、源、五、由、清、は、播、磨、海、津、を、居、城、と、し
、其、余、之、郡、と、上、條、飯、田、上、倉、ふ、よ、と、(老、方
、元、と、回、く、海、津、と、陸、津、せ、) む、氏、共、ハ
、徳、川、殿、上、杉、と、謀、と、合、を、小、條、城、の、後、と
取、切、り、し、と、の、風、流、と、少、く、味、勢、さ、し
、尼、の、倒、り、恒、井、治、は、勤、き、陣、面、と、設、け

志、田、と、は、尼、の、倒、り、後、——上、杉、を、押、し、む
、小、笠、原、赤、部、兵、衛、は、机、大、橋、兼、長、時、の、
、之、男、なり、備、口、兵、衛、一、人、を、具、し、し、京、都
、より、来、り、先、に、其、從、者、洞、吾、の、上、杉、の、後、に、
、少、笠、原、志、の、場、に、在、り、と、京、橋、ふ、ん、と、以、勢
、家人、古、と、流、し、し、終、に、洞、吾、に、後、切、り、せ
、深、志、の、指、と、新、丸、り、父、長、時、の、徳、吉、の、為、に、
、和、國、城、退、出、さ、さ、し、し、し、三、拾、三、年、に、
、和、國、に、入、り、愁、眉、を、開、く、八、月、朔、日、小、條
、氏、重、及、甲、州、を、攻、め、ふ、ん、と、四、万、余、の、人、數
、少、く、佐、州、海、津、口、より、甲、州、若、原、に、發、白

せんとは州及び者より、梶原景時
景時は此也、徳川家印本津下
少(多)は言活の城攻より、酒井
忠次以下、の半皆白頭、
らる、旨忠次兼大久保忠世、
大須賀康房、石川康通、
編年近若陣、
留迫く梶原より、
大久保の家人、
夕日、
此由我告、

之、
す、
草樹、
寸、
合、
追討、
一、
侍、
味、
振、

事よめひたりと云忠次大に怒りに滿
今日の後殿と申一官時別移り己の
別よめひ歎まや白の原小押よき乾
諸士種くと謙和一湯酒井二番大頭
之處石川四番大久保五番多六番
宍山元七番島郷と定めたり打前甲州士
早川三番島郷及早川五番島郷 西邊
能こと来り者も一己之形むといは
早川心續と猪沼の郷へ十人女人抱
竹港を以て大勢伏云以て路よ尾を
を解く 謙のやく時一映地少く困る

~~~~~ 小原の勢よ白の映地と被ひ小原方  
伏兵ありと怪む此方は時別~~~~~ 七隊  
映くよ陣屋と埃拂く 川邊小原勢  
と云追を~~~~~ 大軍 重高のやく當心  
~~~~~ あり歎くと下一先と渡人と云~~~~~  
をむ 東方は少くも強くは歎くと云~~~~~
~~~~~ 又七隊と申すは~~~~~ 謙と云~~~~~  
~~~~~ こと内もは歎く~~~~~ 河くみ~~~~~  
~~~~~ 爲る知こと且怪と云~~~~~ 映地少く~~~~~  
~~~~~ 川退き十四~~~~~ 又歎くと~~~~~  
~~~~~ 謙と云~~~~~ 映~~~~~ 小原勢と

アノコト少ク云々みき侍知

神君新と申す一石川御書有救心我  
加勢も甚ハ侍板垣の川曲圍之店也  
吾系案内者も侍り地形我も之救心小  
備を之す也甚ト小隙の彼處山と御書  
預知と御書を港と合兵御書曲圍と  
討ひ侍りし知一石川勢も侍りて是もハ  
氏直は是と云々故は新也侍り人救と  
川上と云々知一軍を収く若山の方へ  
四邊代味方は雖れも新府へ川直は  
今日忠出侍先は川直一、是部と港後殿

敵は六万は也等々大軍味方は二十の

人救を令く七里の距離を川うけ一人も  
もも願ひ川直の首を令も有侍りとて  
備を置て此六も八將と録取一川直と

源氏物語に云く是れは  
源氏物語に云く是れは  
源氏物語に云く是れは

氏直若山子討陣甘小隙和睡山縁也

一書

神君古書より存在侍りし、小隙氏直

大軍より若山よりと御書有也也中へ

若山は古書より抄年梅後守清宗も居

若山更の元忠内蔵之と云々佐成中健五十抄



脇成を留る守ふ一々八月八日八千と  
たふぬ所人救ふく浅生系(山陣)一戦  
浪夕し山陣は三敗する可く又竹共我  
設ら侍氏屯よりも二万乃次旗本と介後と  
か一者亦又篤とんく語り

徳川勢は別勢係き其中心は備立と赤井  
アはく自尤と身乃毛もよたつや光の  
是は定々

徳川殿自方智馬と云  
くは堅陣中くあり難一と云氏屯怒く  
此大軍を以ていゝく款備堅直なりとて  
一戦せし侍(き)是水一戦せんとい(と)も

松田大造寺遠山等といふ層々の侍大将  
大恐怖一々を備は給く其十日

神君新之府より移りゆい是より救向の留  
五万より軍(大軍)と八十不足の以て救て  
對陣一帷帳の介よおまひゆゆ

とて向ゆゆ々々は天晴不思慮の  
名將と威をぬ者となりゆ氏屯は  
救向の軍より侘果々(那由)(川)(さん)と  
屯向より(少)(弟)は若少子の向不

若と據(松平)上雨介(藤忠)大久保(忠)重  
忠世(若)我以て守ふ其介可くは若我

没らぬ氏直の父氏政は小田原に在り  
軍政をこらへて密令を氏直に賜ふて  
小田原の佐氏直回古も佐氏直は徳川氏は  
徳川氏に密令を賜ふ一戦なきを氏直は小田原  
兵を治りて甲州を打入らぬ此之お州  
之坂崎城に御入りて若王子と謀り合せ甲州  
軍の上口より軍を遣はせり是は古府  
兼右光寺の 徳川勢は小田原に  
氏直は回へて脱討をへて其討は新府  
の勢も治りて 徳川勢は小田原より  
駿府へ御帰るべきなり其期を過たば

氏直若王子より打ちて御るは

徳川勢は密教しよをへてその計も  
打ち御事しよや古府へ告るもの有るは  
古府は古府の元忠松平城は古府宗内最  
三軍の佐成高力槍は古府の正長院之元忠  
原貞水地蔵十郎佐成中は道玄より  
少教れせと僅千五百人我川幸一上京  
の氏直を津市へ押きたり甲州のよの  
古は 徳川家へ密令を未すせ成  
切もなきは古府の計も公報とせん  
人へ密令を御る事なり何は古府

有縁すゝき地理は元より業内なり  
八月十日に胡勢源く人八顔も各合  
せぬ願ふり志先くわく攻動は島依  
氏忠の方には思ひしごとくぬ事打是ハ  
敵くよ討たされ地理は不業内不は  
石山馬の足は立雖も心よりハを事  
とも戦ふもきも多も明く國章頼頼と  
軍勢の方へ出さるる在る古史氏清政業  
戦へとも是も此此之毛も勢も敗らる  
於切半存言新史の密佐田中節史  
吾利中池郷外在宗らくも若干討也

其分谷底へ入るゝ死する者動て二千  
六百人味方は二百余級の首取く  
新府へ柳氏氏忠氏勝は辛き余  
ゆりて二坂の城へ逐陽係新府より  
彼首古と禰結信一氣並つる我  
若少子立陣の小隊動上山口汝軍の  
事は知れ此首とも我見もは皆  
親族知者の首も是は皆、悲泣する  
のみもくも親小力も損果たり  
西暦時りり  
小隊氏邦  
西暦時りり  
西暦時りり  
神君は軍勢也  
備へんとて新府より古府へ隔陣へ

流將年軍切と黄一り小女九日小條對  
三籠り一延生回源孫おぼろの時色小  
味方の信年と也一川田させり  
歎共おと是を討んとは

神君是成少久柳永康政大須賀  
康子大久保忠世石川康通重康春  
野村正保成等とて所出駕り  
歎共是成少久と也一と也侍よ久世  
之節康宣歎此中六重と鑑を金  
源貞貞之冊中へ押入り其首を  
取りと源貞等は大久保治重の

忠佐托く川返は 神君所自文

山葉とや小大須賀先登一終り紫我  
赤破と道日武川元英侍聖士とて  
乃迫合ま何とてと名せ一は前頭を  
揚り新懸は治一候り更浪り候一  
九月朔日氏重より侍候の者小軍兵取  
治くか一古尚哉酒井忠次定討んと  
其是は小條對甲とて是侍女宮よ也  
小條對又道と也侍甲州士地理業内  
り何れ是は後照へとて其孫と取切  
らんと其是とて小條對畏給りて川返

せば合戦及び其氏連は頼朝の合戦と  
西人小島(味方)とせんと言ら(と)小島  
頼朝者は頼朝と結句甚敷

徳川家へ流を以て志田安房守昌幸  
生得先達の者人又小島を頼朝

徳川家へ流を以て志田安房守昌幸  
佐蕃と号す雅水流と号して小島  
頼朝と号す雅水流と号して小島

在陣一と云ふ徳川を以て其  
長根の道と云ふは一日も在陣  
叶難し小島氏連と其首より

神君と云ふは酒井忠次なり

と和漢を以て上州一と云ふ小島(流)と云ふ

甲信両州は山嶺と定め變りてと云ふ  
入(ふ)其(ま)す

徳川殿始君我  
流と氏連の少方とかつ我(と)云ふ

好我結ひ世に流を以てふと云ふ

神君元より寛仁大寺其流を以て免

と云ふ上州沼田は志田の故代の領地

と云ふ甲州郡留郡佐久郡と云ふ

川智治と云ふと約定は千歳朝比奈  
流を以て其首より

氏規沙ハ氏重より大違寺源九郎  
重政山角某と人質とあり此方よりハ  
酒井少左郎家次と人質とあるハ此氏共  
唯水滸と一少左郎と稱一以京  
郡内より大違寺山角と稱一より小  
杉之氏重より地某の使石巻軍人  
河鹿の使とあり十種十右道より十右  
十九日胡比系源吉郎我小田原(度々)  
少左郎有一ハ氏重氏重對面一  
大又腹ハ保太郎より良刀源馬と授く  
廿一日難渡松ハ凱旋一ハ相も甲州

一系平均一若きは軍切の年(曆黃  
外)大久保忠世より佐久那多居元忠と  
郡内と揚り其外加藤新忠救く授  
け又源吉少左郎頼忠ハ大原忠世  
村井市兵衛の檢田源郷と以て先  
酒井忠次より送り一ハ相違ハ事  
あり源忠助也(き)源下さし頼忠  
源一使と有る信く頼忠ハ保昌  
少郎ハ少左郎端ハ佐州より遠堀と保科  
頼重より源忠と稱し一檢田源田某  
村井某より高木吾助郎清秀(他は源氏)

と始武田の遺臣七百五拾七人秋葉寺  
少く誓願を依りて是を依りて寺に  
承三郎成瀬吉吉を寺にとせしむ部田  
家よりこの願を以て味をせしむる者如願  
安堵の象平を下さる又象平元忠は  
甲府の留守居平岩寺の物親吉は元代  
成瀬吉吉の正一日の神樂の定好は  
寺に橋井某市川伊清安昌忠二氣  
源誠新岩留大藏寺の正一日の神樂と  
探索の故に余せしむ大久保忠世業田  
七九郎政之善侶大昭定利は甲府小

在陣一々遠托の徒を糾治せしむる  
井伊万太夫直政は甲州の山縣七尾  
原一條の徳士百七拾人を分て属せしむ  
赤備を許ししむ直政少平とししむ  
大將の臣たる也新保せしむる如きり  
又佐忠卿焼亡されし惠林寺も武田  
代々の菩提所なりしむ新小建位  
少く其跡を以てせしむる織田殿の  
暴政とは重泥の遺臣なりと甲州  
佐州の寺結農高しむる万歳を唱へ  
欽許せしむる有れ業田修理亮信守

使者を遣り甲佐平均を乞ふ一唐藏  
女を綿百肥纏五虎朝一四好と傳ふり  
室は甲州上の木戸は佐吉重頼の者を  
煮殺したる大笠政多行一城  
神君御説一く縁を二一此巻一  
巻を三一と終は治くま運ひ巻一  
市待を及く三州の奉引あ多他是  
室次大は怒り 西形極は物と相りせ  
うう佐吉の要政を寫一諸人の懲一  
め又せんと若干の人史と貴一運一の  
不我くく吾く一きく物と運はせらるるに

心持を<sup>と</sup>とく其巻を<sup>と</sup>皆折碑き<sup>と</sup>源朝は  
沈め<sup>ら</sup>れ<sup>ば</sup>目付役人妙由云上<sup>一</sup>也<sup>も</sup>是<sup>は</sup>  
ぬこ<sup>も</sup>鬼化れ<sup>し</sup>と<sup>と</sup>く<sup>う</sup>ち<sup>の</sup>物<sup>は</sup>ゆ<sup>り</sup>  
者<sup>は</sup>何<sup>と</sup>も<sup>も</sup>君<sup>は</sup>和<sup>睦</sup>の<sup>範</sup>例<sup>す</sup>く<sup>な</sup>り<sup>き</sup>  
事<sup>は</sup>なり<sup>し</sup>と<sup>も</sup>少<sup>し</sup>の<sup>感</sup>せ<sup>き</sup>は<sup>れ</sup>業<sup>者</sup>

改正三河権風土記卷第九終





愛 知 県



1103266585